

陳氏繼志齋と『綴白裘合選』

根ヶ山 徹

一

明代の万暦年間には戯曲文学が爛熟期を迎え、夥しい数の作者が登場して、作品も盛んに作られたことは戯曲演劇史において強調されるところである。その戯曲をどのように楽しんだかについては、受容者の社会的階層によって各種各様であったと思われるが、現存する脚本のなかには、校注や挿図などの施されたものが数多く残されていることからすると、少なくとも読書人階層にあつては、舞台における上演だけではなく、書齋において脚本を手につけての、いわゆる読曲という手段によつても鑑賞したであろうと思われる。

こうした受容形態を承けて、脚本の出版だけではなく、戯曲の散齋や散套のみを輯めた選集も数多く編纂された。明末から清初にかけて出版されたこれらの戯曲選本には、当時、読書人を対象として好評を博した崑山腔によるものだけではなく、例えば庶民観客を対象とする弋陽腔系のメロディーに乗せた演劇が文字化されて、出版されたものも少なくない。

さて、現存する戯曲選本のなかで最も大部で、度々版を重ね、しかも名前が良く知られたものとしては、清中葉の乾隆年間（二十九年・一七六四―三十九年・一七七四）に、錢德蒼によって編纂された『綴白裘』十二篇を掲げることができる。この『綴白裘』は、玩花主人が編んだ祖本に、錢德蒼が手を加えて成立したものとごくである。

ところが、この乾隆年間の『綴白裘』とは別に、『綴白裘合選』なる書物が存在する。その『綴白裘合選』とは、北京大学図書吧古籍善本室に馬廉の旧蔵書として収められている四卷本、及び巻一の残闕と、北京図書吧善本特蔵部に収められている巻四である。該書は明末に出版されたものであるけれども、封面右に「鬱岡樵隱／積金山人全輯」と双行に記して、その下に「翼聖堂梓行」とあり、中央には大字で「綴白裘合選」と刻し、次いで「時康熙歲次戊辰（二十七年・一六八八）、華陽山人漫題」と署する「綴白裘合選叙」が附され、巻一の本文首には「秦淮舟子審音／鬱岡樵隱輯古／積金山人採新」と記されていることから、清の康熙年間に南京の書肆「翼

聖堂」によって重修が施されたものであることが明らかである。「綴白裘合選」の戯曲選本のなかでの位置づけ、内容については、前稿において既に論じてきたので、ここでは触れない。²⁾

本稿は、前稿において触れるべくして触れ得なかつた問題、つまり「綴白裘合選」が明代の誰が編纂し、出版したものであるのかについて明らかにしようとするものである。あらかじめ結論を述べておくならば、「綴白裘合選」の本文の刻字、そして眉欄の校語とその内容、随所に見られる挿図を仔細に検討すると、明代万暦年間在南京において、陳大来の継志斎から出版された戯曲脚本に酷似していることが明らかである。そこで、「綴白裘合選」は万暦年間末葉に南京の継志斎によって出版されたか、もしくは継志斎の戯曲脚本を流用し、模刻した出版したものであるうことについて、当時の南京における出版状況などと照らし合わせながら考察を加えたい。

二

陳大来の継志斎から出版された戯曲関係の書物には、管見の及んだ限り次の二十六種が存する。(実際に調査し得ずに書目類によるものも含む。刊記の存するものは刊行年ごとに纏めた)

・万暦二十六年(一五九八)

『重校琵琶記』四卷、国立公文書館内閣文庫蔵・北京図書館善

本特蔵部蔵(鄭振鐸旧蔵)

『重校北西廂記』五卷、国立公文書館内閣文庫蔵

・万暦二十七年(一五九九)

『重校玉簪記』二卷、北京図書館善本特蔵部蔵(「古本戯曲叢刊

初集」景印)

・万暦二十九年(一六〇一)

『重校紅氍毹記』二卷、路工・北京図書館善本特蔵部蔵

・万暦三十年(一六〇二)

『重校紫釵記』二卷、大谷大学図書館蔵(神田喜一郎氏旧蔵)

・万暦三十二年(一六〇四)

『新鐫古今大雅北宮詞紀』六卷、台湾国立中央図書館蔵

・万暦三十三年(一六〇五)

『新鐫古今大雅南宮詞紀』六卷、台湾国立中央図書館蔵

・万暦三十六年(一六〇八)

『重校錦箋記』二卷、北京図書館善本特蔵部蔵(鄭振鐸旧蔵)

(「古本戯曲叢刊二集」景印)・京都大学文学部蔵

『新鐫量江記』二卷、北京図書館善本特蔵部蔵(「古本戯曲叢刊

二集」景印)

・万暦四十年(一六一二)

『重校義俠記』二卷、傅惜華蔵(「古本戯曲叢刊初集」景印)

・無刊記

『元明雜劇』四卷(「新鐫半夜雷轟薦福碑雜劇」一卷)・「新鐫唐

明皇夜秋梧桐雨雜劇」一卷・「新鐫杜牧之詩酒揚州夢雜劇」

一卷・「新鐫鉄拐李度金童玉女雜劇」一卷、北京図書館

善本特蔵部蔵・傅惜華蔵（「古本戯曲叢刊四集」景印）

「重校五倫伝香囊記」二卷、北京図書館善本特蔵部蔵（「古本戯

曲叢刊初集」景印）・台湾国立中央図書館

「重校十無端巧合紅藻記」二卷、北京図書館善本特蔵部蔵（「古

本戯曲叢刊三集」景印）

「重校韓夫人題紅記」二卷、北京図書館善本特蔵部蔵（「古本戯

曲叢刊二集」景印）

「重校窃符記」二卷、大谷大学図書館蔵（神田喜一郎氏旧蔵）

（「中国戯曲善本三種」景印）

「重校埋剣記」二卷、北京大学図書館蔵（馬廉旧蔵）（国立北平

図書館・「古本戯曲叢刊初集」景印）

「重校呂真人黄梁夢境記」二卷、北京図書館善本特蔵部蔵（「古

本戯曲叢刊初集」景印）

「重校双鱼記」二卷、北京図書館善本特蔵部蔵（「古本戯曲叢刊

初集」景印）

「重校旗亭記」二卷、北京図書館善本特蔵部蔵（「古本戯曲叢刊

二集」景印）

「重校千金記」二卷、傅惜華蔵

「重校班仲升投筆記」二卷、北京図書館善本特蔵部蔵

「重校蘇季子金印記」二卷、北京図書館善本特蔵部蔵（鄭振鐸

旧蔵）

「重校浣沙記」四卷、北京図書館善本特蔵部蔵

「重校玉合記」四卷、路工・北京図書館善本特蔵部・京都大学

文学部蔵

「重校孝義祝髮記」二卷、北京図書館善本特蔵部蔵

「西湖記」二卷、鄭振鐸旧蔵

以上に掲げたもののなかで、刊記の詳細な内容は次のとおりである。先ず、「綴白裘合選」にも散齎が収められているものでは六種に刊記が残されて。「重校琵琶記」冒頭の「刻重校琵琶記序」には「嘉靖戊午、玉峰河間長君撰、万曆戊戌、大来甫重録」、「重校北西廂記」冒頭の「重校北西廂記目錄」には「戊戌孟夏、秣陵陳大来校」とあるように、万曆二十六年（一五九八）の上梓である。「重校玉簪記」冒頭の「重校玉簪記目錄」には「巳亥孟夏、秣陵陳大来校録」とあることから万曆二十七年（一五九九）の、「重校紅払記」冒頭の李卓吾「紅払記題辭」には「万曆辛丑人日、秣陵陳邦泰書」とあることから、万曆二十九年（一六〇一）の、「重校紫釵記」冒頭の湯頭祖「紫釵記題詞」には「壬寅春、秣陵陳大来書」とあることから万曆三十年（一六〇二）の、「重校錦箋記」冒頭の「錦箋記引」には「万曆戊申端午前一日、白門陳大来書于吉祥小止処」とあることから、万曆三十六年（一六〇八）の上梓である。また、「綴白裘合選」に散齎は輯録されていないものでは、「新鐫量江記」冒頭の

「量江記題」には「万曆戊申孟春之吉、銅鵲山人題、一真散人書」とあることから、万曆三十六年（一六〇八）の、「重校義俠記」冒頭の「義俠記序」には「万曆丁未中秋日、東海鬱藍生題、壬子清明日、陳大来手書重梓於繼志齋中」とあることから、万曆四十年（一六一二）の上梓である。この他、戯曲脚本ではないものの、陳所聞が元末明初の套数を輯めた「新鐫古今大雅北宮詞紀」冒頭の「題北宮詞紀」には「万曆甲辰夏、龍洞山農題」、「北宮詞紀小引」には「万曆甲辰午日、友弟朱之蕃識」とあることから、万曆三十二年（一六〇四）の、同じく明人の套数を輯めた「新鐫古今大雅南宮詞紀」冒頭の「題南宮詞紀」には「万曆乙巳夏午、秣陵兪彦識」とあることから、万曆三十三年（一六〇五）の上梓であることが明らかである。その他の戯曲については刊行年は明らかではないけれども、万曆帝の在位が四十七年（一六一九）までであること、上述の刊記が万曆二十六年（一五九八）から万曆四十年（一六一二）までのものであることからすれば、繼志齋が出版に攜わったのは、万曆の中期から末年に至る約十五年から二十年の間であつたろうと考えられる。因に、「重校玉合記」「総題」首には「友人仇池外史梁伯龍校」とあり、梁辰魚と交遊をもち、校勘を経てのもののごとくである。梁辰魚は万曆二十二年（一五九四）頃まで在世しており、やはり繼志齋による出版が万曆中期に始まるものであることを示唆しているよう。

繼志齋の出版に特徴的な事柄は、陳大来が自ら校勘を施し、更に

鈔写したものを版刻に付した写刻本であるということである。このことは、「重校北西廂記」の「重校北西廂記凡例」に「秣陵陳邦泰校録」と言い、同じく「重校北西廂記目録」に「秣陵陳大来校」と言い、「重校玉簪記」の「重校玉簪記目録」に「秣陵陳大来校録」と言い、「重校紅氍毹」の李卓吾「紅氍毹題辭」に「秣陵陳邦泰書」と言い、「重校紫釵記」の湯顯祖「紫釵記題詞」には「秣陵陳大来書」と言い、「重校錦箋記」の「錦箋記引」に「白門陳大来書于吉祥小止処」と言い、「重校義俠記」の「義俠記序」に「陳大来手書重梓於繼志齋中」と言い、「重校五倫伝香囊記」巻下の末葉に「白下陳大来手書刊布」と言い、「重校韓夫人題紅記」巻下の末葉に「秣陵陳大来録梓」と言い、「重校玉合記」の「章台柳玉合記総題」には「秣陵陳大来録鏤」と言うところから明らかであろう。

陳大来が如何なる人物であつたのかは詳らかではないけれども、現存する限りにおいて二十六種もの戯曲脚本や散曲集を上梓していることは、万曆後半期の南京にあつて、かなりの規模を誇った書肆を經營していたことに相違あるまい。

三

さて、陳大来による出版は如何なる評価を受けているのか。

例えば鄭振鐸は、「重刊河間長君校本琵琶記」なる一文において、「重校琵琶記」を「琵琶記」の他の諸版本と比べて、内容、刻字と

もに絶讀する。⁶⁾

重刊河間長君校本琵琶記、元高明撰、二卷二冊、明万曆二十六年陳大來刊本。…このごろ再び富晋書社から陳大來の重刊にかかる嘉靖戊午（三十七年・一五五八）の河間長君校本元本を手に入れた。刊刻は至つて精密である。

このように精刻であることを特徴とする繼志齋刻本を、同じ時期に南京で活躍した他の書肆の出版物と比較して、鄭振鐸は自分の蔵書であった「重校錦箋記」についての一文で、「文人案頭の物」と言っている。⁶⁾

繼志齋（重校錦箋記）二卷 冒頭に万曆戊申（三十六年・一六〇八）の白門陳大來の「引」がある。大來とは繼志齋の主人である。金陵の唐氏一族は、富春堂以下次々に、戯曲の出版を盛んに行つた。陳大來はそれらに続いて出版を始め、出版した戯曲は少なくない。富春堂の戯曲は俳優が上演に際して参考にしたもののように、そのため版刻は大抵粗雑である。繼志齋の出版した戯曲は、文人が書齋で読むためのものである。全篇を通じて軟体の文字を写刻し、挿図も亦た精密であり、新安の刻工の影響を強く受けているようである。

繼志齋刻本は「文人案頭の物」、つまり書齋で読むために出版された、と言う鄭振鐸の見解は、「金陵所鐫版画集」の「量江記」の解説にも見いだすことができる。⁷⁾

【量江記】 これは繼志齋陳氏の刊本である。陳氏の刊行した伝

奇類は、恐らく文士輩の案上の物となつており、ために挿図も入念に計画され、工麗の境を超えることに努めている。

また、同じく繼志齋刻本は「深く新安刻手の影響を受け」た、という点については、同じく「金陵所鐫版画集」の「西湖記」の解説にも、やはり同様の見解が示されている。⁸⁾

【西湖記】 これもまた繼志齋陳氏の出版である。図は非常に精巧で、新安派の作風に近い。

郭味蕓の「中国版画史略」には、以上を総括する形で、次のように言っている。⁹⁾

（繼志齋刻本の）挿図の風格は、金陵唐氏一族の刊本とは、明らかに異なっている。陳氏の諸作は、杭郡と徽郡の諸刊本に努めて追隨し對抗することにあつた。繼志齋が選り用いた刻工は、以上の両地から招請した筈である。（中略）また陳氏の諸作は、版画の風格という視点から見ると、あるものは恐らく徽派の名工の手に成るもので、あるものは故意に模倣し、またあるものは徽工の嫡伝である。しかし精巧細緻なところは、虬村の黄氏から出た諸名家と比擬し得るものである。

ここで、繼志齋を初め、数多くの書肆が出版を競つた明代の南京の、当時の中国全土における位置づけについて概観しておきたい。まず、謝肇淛の「五雜俎」卷十三「事部一」には、明代においては、南京・新安・呉興の三箇所における出版が精密を極めており、宋版に比肩するほどであつたと言っている。

宋時の刻本は杭州を以て上と為し、蜀本 之に次ぎ、福建 最下なり。今の杭刻は称するに足らず、金陵・新安・呉興の三地の、削刷の精なること、宋板に下らず、楚・蜀の刻は、皆な尋常のみ。

また、胡応麟「少室山房筆叢」卷四「甲部・経籍会通四」にも、呉会（呉郡・会稽）と南京の出版が著名であり、盛んであったと言う。

呉会・金陵、名を文献に擅にして、刻本 至つて多く、鉅帙類書、咸な会萃せり。

同じく胡応麟「少室山房筆叢」卷四「甲部・経籍会通四」には、私見として、蘇州・常州が上位で、南京がそれに次ぐと言ひ、謝肇淛とは異なる評価を下している。

葉（少蘊） 又た云ふ、「天下の印書は、杭を以て上と為し、蜀之に次ぎ、閩 最も下る」と。余の見し所の当今の刻本は、蘇・常 上為り、金陵 之に次ぎ、杭 又た之に次ぐ。近ごろ湖刻・歙刻 驟かに精にして、遂に蘇・常と価を争ふ、蜀本の世に行はるること甚だ寡く、閩本 最も下る、諸方 宋の世と同じ。

ここで謝肇淛の言う「新安」、胡応麟の言う「歙刻」とは、安徽の徽州府歙県出身の刻工を指している。先に掲げた鄭振鐸の「重校錦箋記」解説に「新安刻手」と言ひ、「金陵所鐫版画集」の「西湖記」解説に「新安派」と言っているのが、まさしく安徽の刻工のこ

とであり、特に歙県虬村の黄氏一族は同じ村出身の同族が、同じ職業に従事している、いわゆる同族ギルドの典型として著名である。黄氏一族は第二十二世、明の正統年間あたりから刻書を始め、万暦年間には記録に残るものだけでも一三〇種に及ぶ刻書を行ったことが明らかである。¹⁰ 万暦年間、つまり黄氏第二十五世の人々は、当時の新安商人の活発な活動に並行して、蘇州・杭州・南京といった江南の都市に移住して、刻工として後世に名を残す活動をしている。鄭恭「雜記」には、次のように言う。¹¹

歙邑の刻工 明季に盛んにして、虬村の黄氏 尤も良工多し。万暦の時人 黄応瑞、字伯符、図を刻して著称せられ、刻する所に「閩范図説」「歴科状元図考」「程朱闕里志」有り。界画は精整にして、山水・樹木・樓屋・仕女、精絶ならざるは無し。…「西廂記図」黄一楷刻、「目蓮救母曲」黄挺刻、…。

以上のように、明代万暦年間の出版界においては、南京は中国全土で屈指の出版の非常に盛んな土地であったことが明らかである。

四

さて、「綴白裘合選」に輯録される全四十種八十七齣の散齣のうち、継志齋から上梓された原作脚本が現存するものは以下の十五種三十九齣である。

<p>繼志齋刻本</p>	<p>〔綴白裘合選〕</p>
<p>〔重校琵琶記〕 第4齣「蔡公逼試」 第5齣「南浦囑別」 第9齣「臨妝感歎」 第22齣「琴訴荷池」 第28齣「中秋望月」</p> <p>〔重校北西廂記〕 第1齣「仙殿奇逢」 第8齣「琴心寫懷」 第9齣「錦字伝情」 第13齣「月下佳期」</p>	<p>卷一「琵琶記」 「蔡公逼試」 「南浦囑別」 「臨粧感歎」 「琴訴荷池」 「中秋望月」 「北西廂記」 「仙殿奇逢」 「琴心挑引」 「錦字伝情」 「月下佳期」</p>
<p>〔重校五倫伝香囊記〕 第29齣 〔重校蘇季子金印記〕 未見 〔重校浣沙記〕 未見</p>	<p>卷二「香囊記」 「郵亭寄宿」 「金印記」 「蘇秦自歎」 「周氏燒香」 「范蠡遊春」 「浣沙記」 「范蠡遊春」 「蠡迎西施」 「西施採蓮」 「西施憶鄉」 「范蠡扁舟」 「千金記」 「楚宮夜飲」 「戴月追賢」</p>
<p>〔重校玉簪記〕 第8齣「談經聽月」 第16齣「絃裡伝情」 第19齣「詞妬私情」 第21齣「姑阻佳期」</p> <p>〔重校十無端巧合紅蕖記〕 第13齣</p>	<p>卷三「玉簪記」 「談經聽月」 「絃裡伝情」 「詞妬鸞鳳」 「姑阻佳期」 「紅蕖記」 「垂釣関情」</p>

<p>〔重校紅弘記〕 未見</p> <p>〔重校玉合記〕 第5齣「邂逅」 〔重校紫釵記〕 第6齣「墮釵燈影」 第29齣「淚燭裁詩」 〔重校題紅記〕 第17齣「霜紅写怨」 第18齣「金水還題」 第19齣「溪口収春」</p> <p>〔重校班仲升投筆記〕 未見</p> <p>〔重校窃符記〕 第6齣「如姬感穩燒夜香」 第21齣「魏王失符責如姬」</p> <p>〔重校孝義祝髮記〕 未見</p>	<p>卷四「紅弘記」 「仗策渡江」 「論女私奔」 「同調相憐」 「玉合記」 「邂逅章台」 「紫釵記」 「墮釵燈影」 「淚燭裁詩」 「題紅記」 「霜紅写怨」 「金水還題」 「溪口収春」 「投筆記」 「投筆覓封」 「金錢問卜」 「夷邦醉月」 「窃符記」 「祝賢公子」 「祝髮記」 「達磨点化」</p>
---	--

以上に列挙したなかで、実際に調査し得た九種二十三齣の散齣については、先に触れたように、「綴白裘合選」と繼志齋刻本の版式は全く同一である。行格は共に半葉十行行二十字（白は小字双行）で、眉欄に校語が記されているという点も同じである。また版框も、共に縦約二十一cm、横約十四cmで殆ど同じである。

先ず、刻字について見ると、清代に補修されている箇所は除いて、完全に同一とは言いがたいものの、少なくとも同一人物が鈔写したものを刻したことは明らかである。

〔綴白裘合選〕 卷一「琵琶記」の散齣四種（第三葉表至第二十葉

裏)、「北西廂記」の散齣四種(第二十葉裏至第三十五葉表)は、一部の眉欄校語が省略される以外は継志齋刻本に同一である。

卷二「香囊記」(第八葉裏至第十二葉裏)は、継志齋刻本に完全に一致する。

卷三「玉簪記」の散齣四種(第十七葉裏至第二十七葉裏)、「紅蓮記」(第五十八葉裏至第六十一葉裏)は、継志齋刻本に完全に同一である。

卷四「玉合記」(第七葉表至第九葉裏、第八葉は清代補修)、「紫釵記」の散齣二種(第十二葉表至第十九葉表、第十五葉は清代補修)、「題紅記」の散齣三種(第十九葉表至第二十七葉裏)、卷四「窃符記」の散齣二種(第四十一葉裏至第四十六葉裏)は、継志齋刻本に完全に同一である。

〔図版一〕は「北西廂記」「錦字伝情」の冒頭部分であり、継志齋刻本の第九齣「錦字伝情」と、行格は完全に同一で、刻字も酷似する。

〔図版二〕は「紫釵記」「墮釵燈影」の冒頭部分であり、やはり継志齋刻本の第六齣「墮釵燈影」と、行格はもとより、刻字も酷似する。

次に、挿図について見ると、継志齋刻本をそのまま模刻したものが存するけれども、継志齋刻本の対幅の挿図を半葉に改めたものが多く見られる。

〔綴白裘合選〕卷一「琵琶記」「琴訴荷池」の挿図(第十五葉表)

は、継志齋刻本の対幅の挿図(卷三第一葉裏・第二葉表)を半葉に、「中秋望月」の挿図(第十九葉表)も、やはり同刻本の対幅の挿図(卷三第十八葉裏・第十九葉表)を半葉に改めたものである。

同卷「北西廂記」「仏殿奇逢」の挿図(第二十一葉裏)は、継志齋刻本の対幅の挿図(卷一第三葉裏・第四葉表)を半葉に、「錦字伝情」の挿図(第三十葉表)も、やはり同刻本の対幅の挿図(卷三第三葉裏・第四葉表)を半葉に改めたものである。

卷二「香囊記」「郵亭寄宿」の挿図(第十葉裏)も、継志齋刻本の対幅の挿図(卷下第十八葉裏・第十九葉表)を半葉に更改したものである。

卷三「玉簪記」「談経聴月」の挿図(第十八葉裏)は、継志齋刻本の挿図(卷上第十四葉裏)に同じである。

卷四「玉合記」「邂逅章台」の挿図(第八葉表)は、継志齋刻本には見られない。

同卷「紫釵記」「墮釵燈影」の挿図(第十五葉表)は、継志齋刻本の対幅の挿図(卷上第十葉裏・第十一葉表)とは全く異なっている。

〔図版三〕は「琵琶記」「中秋望月」の挿図であり、継志齋刻本では右側に高樓の欄干に左腕を掛けて月を眺める蔡邕と、側に立つ牛丞相の娘を、左側に侍女の惜春と老女、そして酒肴を並べたテーブルが画かれているのに対して、「綴白裘合選」では蔡邕と牛丞相の娘を高樓の角に移動させ、更に惜春・老女・テーブルも同じ葉内に

移している。

〔図版四〕は『玉簪記』「談経聴月」の挿図であり、継志斎刻本と『綴白裘合選』は同じ図柄である。

この他、未調査ではあるけれども、継志斎刻本の現存する六種十六齣についても、恐らく同様のことが言えるであろう。

尚、継志斎の雕版に携わった刻工については、管見の及んだ限りにおいて、唯一、『紅葉記』の第三齣の挿図に、「新安何龍画／宛陵劉大德鑄」と名前が遺されている。この一例のみから、俄には断じ難いけれども、富春堂や世徳堂の平面的で稚拙な挿図に比して、継志斎刻本の挿図は立体感に富み、精緻を極めたものであることから、前掲の鄭振鐸や郭味蕓に指摘されるとおり、新安派の手に成るものであるう。

五

前節に見たように、版式はもとより、刻字は酷似し、挿図も明らかに模倣していることからすれば、『綴白裘合選』も陳大来自身の手を経て上梓されたか、あるいは継志斎刻本の戯曲を流用し、模刻して上梓されたものである可能性が極めて濃厚である。

仮に継志斎が『綴白裘合選』を上梓したとすれば、『綴白裘合選』上梓の時期も自ずと明らかになるう。現存する戯曲脚本類に遺される刊記から、継志斎は概ね万暦の後半期を中心に戯曲脚本を次々と

公刊した書肆であることは夙に述べたとおりである。加えて、戯曲選本への散齣の輯録が原作脚本の上梓に先行するとは一般に考え難いことから、『綴白裘合選』は早くとも万暦三十六年以降、すなわち、万暦後半に上梓されたものと推定される。更に言うならば、継志斎は自らの手に成る戯曲脚本を簡約し、未公刊の脚本類についても人口に膾炙した散齣を新たに雕版に附して、それらの会萃に『綴白裘合選』と命名して上梓したのではないか。継志斎によって行われた、『綴白裘合選』のかかる出版の経緯は、明末に盛行した戯曲選本の成立過程について我々に知らしめてくれるという点で極めて貴重である。勿論、重修に際して附された封面は清人の手に成るものであり、継志斎と何ら関わりをもたぬことは言うまでもない。

注

(1) 李克明「綴白裘新集序」には「玩花主人所編『綴白裘』、乾隆癸未夏、有錢子沛思、刪繁補漏、循其旧而復綴其新、欲証当世之知音者」と言い、程大衡「綴白裘合集序」には「玩月〔花〕主人向集『綴白裘』、錢子德蒼搜採復增輯」と言い、李宸「綴白裘二集序」には「玩花主人編『綴白裘』、集彙已往之伝奇、悦世人之心目」と言う。尚、『綴白裘』の上梓は些か複雑で、先ずは乾隆二十九年から同三十三年にかけて『時興綴白裘』が初編から五編まで公刊された。ところが、乾隆三十五年には既

出の五編を「新訂時調崑腔綴白裘」なる名称で再編し直し、同年には「新訂時興文武双班綴白裘六編」が、次いで翌三十六年に「補訂時調崑腔綴白裘七編」、及び「再訂文武合班綴白裘八編」が、翌三十七年に九・十編が編まれる。乾隆三十八年には既出の七・八編は解体され、「重訂崑腔綴白裘」と称して崑山腔の散齣のみが輯録され、翌三十九年には旧八編に輯録されていた梆子腔の散齣が「綴白裘梆子腔十一集外編」に包摂され、更に「時尚崑腔補編十二集」が公刊され、一応の完結を見たごとくである。

- (2) 「明末清初における戯曲選本の纂輯―明刻清康熙間重修本『綴白裘合選』について―」(『中国文学論集』第二十五号、一九九六)、及び「明刻清康熙間重修本『綴白裘合選』初探―『綴白裘』の成書と転変―」(『東方学』第九十三輯、一九九七)。(3) 未見。刊記については傅惜華氏「明代伝奇全目」(人民文学出版社、一九五九)四十五頁による。

(4) 未見。前掲注(3)に同様。

- (5) 「劫中得書記」(『西諦書話』、生活・読書・新知三聯書店、一九八三)。

(6) 「西諦所藏善本戯曲題識」(『鄭振鐸古典文学論文集』、上海古籍出版社、一九八四)。

- (7) 「金陵所鐫版画集」(『中国版画史図録』第四冊、版画刊行会、一九三四)。

(8) 前掲注(7)。

(9) 「中国版画史略」第三章「明代的版画芸術(上)」第三節「金陵各家及其他挿図劇曲」(朝花美術出版社、一九六二)。

(10) 周蕪氏「徽派版画史論集」五「黄氏宗譜」与黄氏刻書考証」(安徽人民出版社、一九八四)による。

(11) 張海鵬・王廷元両氏主編「明清徽商資料選編」(黄山書社、一九八五)による。

(ねがやま とおる 山口大学人文学部)

重校北西廂記三卷

正名

老夫人命醫士 崔鶯鶯寄情詩
俏紅娘問湯藥 張君瑞害相思

第九齣

錦字傳情

鶯上云自昨夜聽琴更不復見張生我如今看紅娘
去書院裡看他說甚麼話紅娘云紅娘身子不快呵你怎
知有甚事須索走一遭鶯云這般身子不快呵你怎
麼不來看我紅娘云我有一件事夾及你咱紅娘云我張看
如哩鶯云我有一件事夾及你咱紅娘云我張看
云你與我去望張生走一遭看他說甚麼話來回我
拜你兩拜你便與我去走一遭不是麼鶯云好姐我
便了說道張生你病重則俺姐也
不弱只因午夜調琴手引起春閨愛月心

仙呂賞花時 俏紅娘
懶去添春恨 壓眉尖 若得靈犀一點 敢醫可了病
懶

北西廂記

卷三

懶下生上云紅娘去了看他回來說甚麼話我有主意
却見俺那小姐我看長老說將去道張生好生病重
却怎生不見人來看我因將上來且睡些兒咱
紅上云奉小姐言語着我看張生須索走一遭我想
來咱每一家若非張生呵怎存俺一家兒性命也

仙呂點絳脣 相國行祠寄居蕭寺 因喪事幼女孤
兒將欲從軍死

觀江龍謝張生伸志 一封書到便興師 顯得文章有
用 足見天地無私 若不是翦艸除根 半萬賊險些兒
滅門絕戶 俺一家兒鶯鶯 君瑞 許配 雄雌 夫人 失信
推托 別詞 將婚姻 打滅 以兄妹 為之 如今 都廢 却成
親事 一箇 價物 突了 胸中 錦繡 一箇 價 泪流 濕臉 上 胭脂

空不問俺口不應 狠毒娘 怎肯別離了 志誠種
尾聲 則說道 夫人時下 有人啣 嚙 好 笑 歹 不 着 你

錦字傳情

鶯上云自昨夜聽琴更不復見張生我如今看紅娘
去書院裡看他說甚麼話紅娘云紅娘身子不快呵你怎
知有甚事須索走一遭鶯云這般身子不快呵你怎
麼不來看我紅娘云我有一件事夾及你咱紅娘云我張看
如哩鶯云我有一件事夾及你咱紅娘云我張看
云你與我去望張生走一遭看他說甚麼話來回我
拜你兩拜你便與我去走一遭不是麼鶯云好姐我
便了說道張生你病重則俺姐也
不弱只因午夜調琴手引起春閨愛月心

仙呂賞花時 俏紅娘
懶去添春恨 壓眉尖 若得靈犀一點 敢醫可了病
懶

懶下生上云紅娘去了看他回來說甚麼話我有主意
却見俺那小姐我看長老說將去道張生好生病重
却怎生不見人來看我因將上來且睡些兒咱
紅上云奉小姐言語着我看張生須索走一遭我想
來咱每一家若非張生呵怎存俺一家兒性命也

仙呂點絳脣 相國行祠寄居蕭寺 因喪事幼女孤
兒將欲從軍死

觀江龍謝張生伸志 一封書到便興師 顯得文章有
用 足見天地無私 若不是翦艸除根 半萬賊險些兒
滅門絕戶 俺一家兒鶯鶯 君瑞 許配 雄雌 夫人 失信
推托 別詞 將婚姻 打滅 以兄妹 為之 如今 都廢 却成
親事 一箇 價物 突了 胸中 錦繡 一箇 價 泪流 濕臉 上 胭脂

第六齣

墮釵燈影

夜叶奇亞

鳳凰閣引生絳臺春夜舟三素娥欲下香街羅綺映

韶華月浸嚴城如畫童鈿車羅帕相逢處自有暗塵

隨馬生笙歌盡界酒樓樓臺難踏蓮花萬樹關誰家見

教咱今夜花燈觀着那人來也童千萬燭光中千花

點裡將笑語遞分衣香暗認不枉今年玩燈道猶未

了童望見王孫士女看燈來也生別有千金笑來映九枝前下王孫士女笑上

園林好謝皇恩燈華月華謝天恩春華歲華遍寫着

國泰民安天下遨頭去唱聲華下老旦引上

說燈花南天門最佳香車隘挑籠絳紗唱道轉身

停馬塵影裡看誰家呀那裡黃衫大漢一匹白馬來

反本山東向長安作俊家趁燈宵遊俠邪聽街鼓

兒幾更初打內笑科前而好漢是甚姓名人高馬大

名姓黃衫豪客是也說燈影裡一鞭斜下生童

了童呵胡離們去了也燈影裡一鞭斜下生童

反送風光看人兒那此並香肩低迴着笑歌天街梵

琉璃光射等的個蓬閣苑放星槎望科虛下老旦

反絳樓高流雲弄霞光灑灑珠簾翠瓦小立向迴廊

月下閒喚着小梅花生童上童衆驚下童一似

人真奇豔也兀的不不是梅精止掛銀窗東的墜地也

江兒水生則道是淡黃昏素影斜原來是燕參差簪

挂在梅梢月眼看見那人兒這搭遊還歇把紗燈半

搜抄士

射叶針亞

叨何事空饒舌却不慮漏消息

叨花有清香月有陰生碧梧風院聽知音

公道迴消息千回恨裁作長詠寄錦琴

墮釵燈影紫釵

鳳凰閣引生絳臺春夜舟三素娥欲下香街羅綺映

韶華月浸嚴城如畫童鈿車羅帕相逢處自有暗塵

隨馬生笙歌盡界酒樓樓臺難踏蓮花萬樹關誰家見

教咱今夜花燈觀着那人來也童千萬燭光中千花

點裡將笑語遞分衣香暗認不枉今年玩燈道猶未

了童望見王孫士女看燈來也生別有千金笑來映九枝前下王孫士女笑上

園林好謝皇恩燈華月華謝天恩春華歲華遍寫着

國泰民安天下遨頭去唱聲華下老旦引上

說燈花南天門最佳香車隘挑籠絳紗唱道轉身

停馬塵影裡看誰家呀那裡黃衫大漢一匹白馬來

反本山東向長安作俊家趁燈宵遊俠邪聽街鼓

兒幾更初打內笑科前而好漢是甚姓名人高馬大

名姓黃衫豪客是也說燈影裡一鞭斜下生童

了童呵胡離們去了也燈影裡一鞭斜下生童

反送風光看人兒那此並香肩低迴着笑歌天街梵

琉璃光射等的個蓬閣苑放星槎望科虛下老旦

反絳樓高流雲弄霞光灑灑珠簾翠瓦小立向迴廊

月下閒喚着小梅花生童上童衆驚下童一似

人真奇豔也兀的不不是梅精止掛銀窗東的墜地也

江兒水生則道是淡黃昏素影斜原來是燕參差簪

挂在梅梢月眼看見那人兒這搭遊還歇把紗燈半

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

西卷上

〔図版三〕「琵琶記」第二十八齣「中秋望月」

繼志齋刻「重校琵琶記」卷三（18 b・19 a）



「綴白裘合選」卷一（19 a）



〔圖版四〕「玉簪記」第八齣「談經聽月」
繼志齋刻「重校玉簪記」卷上（14 b）



「綴白裘合選」卷三（18 b）

